

した。標識 Oxytocin の精製は Sephadex G-10 及び DEAE-Sephadex A-25 column chromatography により行った。

(2) 抗 Oxytocin 血清は、合成 Oxytocin を用いて、モルモットで作製した。

(3) Assay の感度は 0.02 mIU/ml 以上であり、Arginine 及び lysine-vasopressin の交叉反応はほとんど認められなかった。

(4) 5単位の合成 Oxytocin を正常雌及び妊娠末期家兎に静注し、以後経時的に血漿中 Oxytocin 値を測定した。正常家兎では静注後3分目に 0.69 mIU/ml と peak 値に達したが、妊娠家兎では、静注後1分目に peak を示し、濃度も 0.40 mIU/ml と低く、濃度の半減する速度も、正常家兎の場合に比してすみやかであった。

## 5. $T_3$ の Radioimmunoassay

○末次 信昌 小林 勝昌 堀野 正治  
(山口大 3 内)

甲状腺機能検査法として、 $T_3$ -RSU, PBI の測定が広く行われているが、これらの方法は、技術の点で、あるいは異常ヨード蛋白の影響等の問題があり、必ずしも満足すべき成績が得られないことが多い。私達は自家製の抗血清を用いて、 $T_3$ -RIA を行い、ほぼ満足すべき結果を得た。ANS (200  $\mu$ g/ml) を含む 0.1 M ほう酸緩衝液, pH 8.6 を用いた。Standard の部分には charcoal 処理ヒト血漿を添加した。 $^{125}$ I- $T_3$  はダイナボット社から提供されたものを用いた。第一反応は、5°C にて Overnight Incubation により行い、Dextran-Coated charcoal を加え、Free と Bound を分離し、Free/Total を用いて標準曲線を作製した。抗血清、Final Dilution 1:46800 を用いて感度良好の標準曲線を得た。この測定系を用いて甲状腺疾患々者の血中  $T_3$  を測定した。 $T_3$  値は臨床症状とよく相関した。以上  $T_3$  の Radioimmunoassay について報告した。

## 追加

湯本 泰弘

(岡山大 1 内科)

TRH 500 を静注し、血中 TSH,  $T_3$ ,  $T_4$  を経時的に追跡測定し、原発性甲状腺機能と続発性甲状腺機能低下の鑑別に有用であった。TRH 負荷によつて 60~180 分で血中  $T_3$  は軽度の増加傾向を示した。血中  $T_4$  はほとんど変らなかつた。

## 6. Ferrokinetics に関する研究

—無効造血を示す症例を中心に—

○長谷川 真 吉岡 溥夫 岩崎 一郎  
(岡山大 2 内)

正常及び多くの疾患では血清鉄と PIDT, PIT と RIT の間には正の相関, PIDT と % RCV の間には負の相関がみられるが、これらの相関からずれている無効造血を示す症例について検討した。

Shunthyperbilirubinemia では PIDT 25分と短縮しているが % RCV は 30.5% と低く、体外計測で静注1日後の骨髓摂取は正常だが、骨髓よりの遊離は遅延し、再上昇もみられ無効造血を示した。貧血と黄疸を主症状とした SLE も PIDT 26分, % RCV 26.5%, PIT 3.84 mg/kg で体外計測で骨髓に摂取された鉄は3週後にもなお多量存在し、脾の摂取はみられず赤血球寿命は正常で無効造血(骨髓内溶血)による貧血と診断した。多核赤芽球と赤芽球の結合像が多数骨髓にみられた Dyserythropoietic anemia では PIDT 117分, % RCV 0%, PIT 3.53 で3日後より脾へ大量摂取され、赤血球寿命は19日で異常赤芽球崩壊による無効造血である。Sideroblastic anemia でも無効造血を示した。